校長研修だより８１

教師の勢力資源

2022・11・9　　重枝 一郎

ある生徒が厳しいＡ先生の注意をおとなしく聞いているのは，「もっと怒られるから？」それとも「正面からぶつかってくれることに尊敬の念を感じているから？」ともかく理由がある。そしてそれは，生徒一人一人で理由が違う。先生一人一人に対しての生徒の感じ方が違う。つまり，生徒たちは，その先生に何らかの「勢力」を感じているということである。そして，生徒はその「勢力」に従っている（あくまでも生徒が感じている勢力）。このことが，タイトルである**「教師の勢力資源」**の意味である。

その「勢力」には，下の６つの「勢力資源」からなる。（早稲田大学　河村茂雄先生）

①準拠性　　：好意，尊敬，信頼，あこがれ
②親近・受容性：親近感，被受容感
③熟練性　　：専門性に基づく教え方の上手さ，熱心さ
④明朗性　　：性格上の明るさ，楽しい気分になることに基づく
⑤正当性　　：「先生」という役割や社会的地位に基づく
⑥罰・強制性　：従わないと罰せられたり成績にひびいたり，それを避けようとすることに基づく

小学生は，その先生のことが，好きかどうかが，最も重要な勢力資源になっている。どんなに教え方がうまくかつ熱心でも，親しみや明るさ，悩みなどを受け入れてくれる対応や雰囲気がないと，その先生に対して魅力を感じることはなく，授業にものってこないという面がある。発達的に幼い分，小学生は先生に対して，より人間性を求めているといえる。

小学生が〈先生の魅力〉ととらえていた視点も，中学生になると〈人間的な魅力〉と，先生としての〈役割に対する魅力〉を分化してとらえることができるようになる。つまり中学生は〈先生の人間的魅力〉と〈先生役割の魅力〉の両方の勢力資源を先生に強く感じているとき，その先生の指導に素直に進んで従おうとする。どちらか一方の場合は，中学生は先生を選ぶようになる。例えば，友人関係の相談はＡ先生，勉強の相談はＢ先生という具合である。しかし，その場合は全面的に信頼しているわけではないので，その部分の勢力を感じられなくなると，その先生そのものを否定するようになる。最も中学生が嫌う先生の対応は，対決を避け，批判の矛先をかわそうとする先生の態度になる。「叱るべきときに厳しく叱れない先生」に対して，侮った態度をとる。

中学生と高校生は，先生をとらえる視点がかなり似ているが，決定的な違いがある。中学生は先生の授業の教え方のうまさや熱心さをみて「先生らしい」と感じるのに対して，高校生は，人間的な魅力に「先生らしさ」を感じる。ひとりの人間として尊敬できるか，親しみをもてるかということを，高校生は重要視する。つまり高校生では，〈先生の人間的魅力〉を強く感じさせることができるかどうかがとても重要になってくる。